

初期の友禅染をめぐる一考察 —— 伝伊達綱村所用の友禅染産着を中心に

高木 香奈子（関西学院大学）

友禅染はわが国を代表する染色技法として知られ、その成立は小袖雛形本などの文献研究により、貞享期（1684～1688）を下らないものと考えられている。さらに近年、元禄3年（1690）銘の友禅染打敷が発見されたことにより、初期の友禅染の一例が明らかになった。この打敷には友禅染の特徴である糸目糊の技法が確認できるとともに、浅葱、萌葱、茶（黄色に赤味を加え、さらに墨を重ねた色）を基調にした友禅染の彩色が施されている。こうした配色の友禅染は他にもいくつか存在することが近年の調査でわかっているが、それらは貞享4年（1687）の『源氏ひなかた』に「友禅染にして萌葱、茶、浅葱、中色にしていろいろ色絵入てよし」とある記述に類似し、文献と実物資料の両面から初期の友禅染の具体的な様相が明らかになりつつある。

ここで問題となるのが万治2年（1659）誕生の仙台藩第4代藩主伊達綱村（1659～1719）所用と伝えられる友禅染の産着である。この産着は背に海松に貝、裾に干し網の模様を友禅染で表し、紋所には仙台藩伊達家の定紋である竹に雀紋が置かれている。綱村所用の産着として仙台藩の陰陽師を務めた平野家に代々伝来し、現在は東京国立博物館に寄託されている。この伝来を信じれば産着は万治2年に制作された友禅染の例ということになる。これまでの研究では、伝来を肯定し、友禅染の最も早い例として紹介されてきたが、その一方で模様の配置構成や技法的な特徴をもとに元禄（1688～1704）から宝永期（1704～1711）頃にかけての制作を示唆する説がある。

しかしながら近年の初期友禅染の研究成果をふまえると、この産着が万治2年に制作されたとするには時代的な隔たりが大きく、また模様の配置構成や技法的な特徴から検討しても制作年代を宝永期まで下げる必然性は見当たらない。本発表では、まず昨今明らかになってきた貞享から元禄期頃に制作されたと考えられる一連の初期友禅染の例を示し、その特色を明らかにするとともに、伊達綱村所用と伝えられる産着の特色がそれらと類似することを示す。さらに友禅染の技法が綱村誕生の万治2年ころにはまだ登場しておらず、貞享から元禄初頭にかけて成立したことを小袖雛形本などから立証する。このようにして産着について友禅染の模様の配色や染色技法、墨書きによる描絵の表現、あるいは干し網の模様形式や全体の模様構成などの点から検討を加え、その制作年代を再考した結果、延宝期（1673～1681）以降貞享、元禄初頭に制作された初期友禅染の一例であるという結論を導くとともに、初期の友禅染がどのように成立したのかという問題について考察する。